

2 アイヌ語地名のイモッペについて

a はじめに

道内のアイヌ語地名の中で、イモッペと呼ばれているのはただ一か所、鵜川町の宮戸4遺跡の立地する沢谷を流れる川のみである。この「イモッペ」について『鵜川町史』には「地名解」の項目で、更科源蔵が次のように書いている。

「井目戸(いもっぺ) 鵜川町宮戸の古名。イモッペとは魚を釣る餌などのことで、この辺で昔よくみみずを掘ったといわれている。」

現在広く流布しているのは、この「みみず」にまつわる地名説であるが、ほかに説明がないわけではない。ここでは、古地図、古文書などの諸資料を検討し、地名「イモッペ」がどのように表現されてきたかを明らかにし、さらに、「みみず」とは異なる地名起源について、その説の成り立つアイヌ文化期における古地理的、古景観的な妥当性の検討をおこなう。

b 地名ムカワと地名イモッペ

地名「ムカワ」は、近世にあつては東蝦夷地に属し、「勇払」から十勝、根室などへ向う主要経路にあつており、多くの地図類にその地名が表されてきた。当時の陸路は海岸線に沿ったもので、勇払を東へ出発すると、ムカワは最初の宿泊地である「サルプト」までの中間である。日高路を東から来ると勇払まで半日の行程であり、旅人にとって今宵の勇払泊まりを目前にした昼飯の場所でもあった。川ムカワは、当然船で渡る。

現在の鵜川市街地が立地する付近が「ムカワ」と呼ばれるようになるのは19世紀中頃からであり、それ以前は一級河川鵜川の河口付近、東岸の地が「ムカワ」と称されていたようである。しかし明治政府の鉄道を含めた陸路の整備は、東岸の「ムカワ」地区にとって主要交通路からの逸脱を意味していた。「アイヌ文化期」の頃には荒地であつた場所が、やがて市街地となっていくことにより、地名「ムカワ」は西岸で生き延びることになったのである。

このような「ムカワ」の位置変化とは異なり、東岸の「イモッペ」は場所が移動することはなかったにもかかわらず、すべての古地図、古文書などにおいて、地名イモッペは地名ムカワと関連して表現されてきた。したがって、ここではムカワとイモッペが表現されているものを、古いものから新しいものへと時代の順に拾い出していく。

c 古地図での表現

多くの古地図を紹介してある『北海道古地図集成』(高倉新一郎編著、1987年、札幌)を見ていく。

- ①『和漢三才図会、蝦夷之図』(1713年、正徳3年)「ムカワ」。
- ②『津軽一統志、巻十附図』(1731年、享保16年)「ムカハ」。
- ③『東山道陸奥松前千島及方州掌覧之図』(1789年頃、寛政元年)これには「サル」の西側に「ムカウ」と読める地名が二つ並んでいる。
- ④『蝦夷古地図』(1790年、寛政2年)「ムカワ」。
- ⑤『東西蝦夷地図』(1801年、享和元年)「ムカワ川」。
- ⑥伊能忠敬の中図は『蝦夷国測量図』(1821年頃、文政4年)と呼ばれているものである。東蝦夷地沿海部の地名のなかに「ムカワ」「ムカワ川」がある。これらの文字の西側には大きな水域が描きこまれている。
- ⑦間宮林蔵の図と伝えられている『蝦夷全図』(1822年、文政5年)は、内陸の河川湖沼など詳細なものである。ここに見る『北海道古地図集成』の図は、尺があまりにも大きすぎて地名が読み取れないが、河川名に関しては、部分拡大図とでもいえるものが小林和夫作成で示してある(図II-2-1)。この小林作成の付録図には多くの地名が記されており、「ムカワ」の河口部には地名「シモムカワ」がある。

この『蝦夷全図』は、さいわいにも、恵庭市郷土資料館の1999年夏の特別展示『記録に現れたエニフ』において、国立国会図書館所蔵の『蝦夷図』の名称で写真パネルとして展示された(口絵4)。この「ムカワ」川筋の東岸の支流名は、下流から「ライバヂン」「イウモッペ」「ヲサン子ッ」「アツツルベシベ」「ヲルイカ」などが読み取れる。ここで気がかりなのは「ライバヂン」の親元の河川名といえる「チン」が見当たらないことである。

⑧松浦武四郎には、自著図および関係・関連図など、多くの記録がある。『東西蝦夷山川地理取調図』(安政6年)、『東蝦夷日誌』、『官版実測日本地図、蝦夷諸島』、『北海道国郡全図』(1869年、明治2年)など、すべて「ムカワ」である。これらのうち『東蝦夷日誌』の基礎資料とでもいえる『武加和誌』の図では、「イモクナイ」が読み取れる。

⑨ほぼ同じ頃の『北海道歴検図、北海道国郡全図』(1871年、明治4年)では「ムカハ」が胆振州ではなく、日高州に属するような表示になっている。

⑩『三角術測量北海道之図』(1875年、明治8年)、は開拓使地理課の刊行であり、英文題名は「THE ISLAND of HOKKAIDO」となっている。ここでは「ムカワ」であり「Mukarwa. R」も読み取れる。

⑪『石狩原野殖民地撰定概図』(1891年、明治24年)に示してある「鵜川」原野は、現在の鵜川町域よりも上流域のことである。

以上に見てきた諸地図の表記は、「ムカワ」「ムカハ」であり、コタンと川の名称である。イモッペの初出は、⑦『蝦夷全図』の「イウモッペ」であり、川の名称である。⑧松浦武四郎の『東蝦夷日誌』『武加和誌』では「イモクナイ」「イモクベ」とあり、川とコタンの名称である。

d 5万分の1地形図

①図II-2-2は1896年(明治29年)「陸地測量部」製版の「北海道假製五万分一図」『鵜川』(ムカハ)である。これは「假製」という制約もあって、海岸線や河川に比べて丘陵や山地の表示は概略的になっている。この図の地名表記は、すべてアイヌ語をカタカナ、漢字で写したものばかりであり、「佐瑠太(サルプト)村」と「鵜川(ムカワ)村」との境界は、日高、胆振の国郡の境でもある。

「イモッペ沢」の表示があり、小径(こみち)がこの「沢」を横切っている。この小径は当時の地図表現では「小路」と呼ばれていた。「小路」はアイヌコタンや「場所」「番屋」「会所」を連絡するものであり、踏み分け道である。イモッペ沢から小径を東に向かうと、「ポロヲサン子ッ」を横切り、丘陵縁を北に進み、やがて穂別、平取の方面へ抜ける道筋に達するはずである。

小径を西側へ行けば、3キロメートル足らずで「チン」「ライ(バ)チン」に達する。さらに「ライ(バ)チン」から西へ500メートル進むと大きな道路にあたる。大きな道路は、この図幅では左端に「室根自」の文字があるが、元図では右から左に読むと「自根室至苫小牧」なので、根室と苫小牧とを結ぶ官道である。

この官道は19世紀前半の諸旅行記に表れる道筋が、改良されてできたものである。つまり「ライ(バ)チン」から「佐瑠太(サルプト)村」間では、標高20m前後を行くもので、『入北記』に「此間山道なれども平坦にして、歩行大に宜し」とみえ、松浦武四郎が「陸道」と記述したのにあたる。川「鵜川」の東岸には「イモッペ」の地名が描きこまれ、ゆるく曲がる「小路」は段丘の縁に沿ってコタンを連絡する生活道路である。川の西岸、官道の北側、のちに鵜川市街地が形成される辺りに「文」の記号があり、学校が認められる。

「イモッペ沢」の周辺は、概略的な丘陵の表現にあっても、標高20mの等高線が南側に食い込んでいる様子が捉えられている。この沢地形と宮戸4遺跡との関係は図II-1-4(21ページ)の1950年頃の地形図とも調和的である。そして「イモッペ沢」の下流部は沼沢の荒地であり、途中の流路約1キロメートルは見失われる。

②図II-2-3は、1921年(大正10年)「大日本帝国陸地測量部」発行の「鵜川」である。この頃までには

鷗川市街地が形成されて、大きな道路(官道)が3キロメートルほど内陸部に直線的に走っている。その道路の脇に「井目戸(イモッペ)」の集落地名がある。沼沢の中に「イモッペ」川の流路が描き込まれている。③図Ⅱ-2-4は、1949年(昭和24年)「地理調査所」発行の「鷗川」である。直線で延びる道路が多くなり、以前低湿な荒地と表現されていたところの大部分が、水田と化した。この図でも描き込まれている「井目戸(イモッペ)」は集落地名のみである。井目戸が宮戸と呼ばれるようになるのは、1943年(昭和18年)の字名改正からである。

最古の5万分の1地形図を見ると、イモッペ沢は南側に食い込んだ地形と表現されており、ここを横切る踏み分け道が存在する。この小さな道はアイヌコタンを結ぶものである。イモッペ沢の下流部は沼沢地であり、流路は判然としない。鷗川の東岸にあるイモッペの集落には、チン、ライバチンからの踏み分け道が通じている。イモッペの集落は昭和の字名改正により、宮戸と呼ばれることになる。

e 19世紀までの古文書の記録

古文書などに「ムカワ」「イモッペ」がどのように記録されてきたかを、時代の順に示しておく。

①『元禄郷帳』は1700年(元禄13年)の調査記録である。これには、東蝦夷地61部のうちのひとつとして「ムカワ」「む川」が記してある。『東夷竊々夜話』は、1805年(文化6年)の見聞記録である。このなかに『松前郷帳』(元禄13年)の記述が引かれており、「イモクペ、ムカワフト」の地名がある。

②羽太正養の『休明光記巻之五』(1803年、享和3年)には「休所ムカワ」とある。

③秦檜麻呂の『東蝦夷地名考』は、1808年(文化5年)の記述である。地名「ムカワ」は存在するがその地名の意味などについては、「未考」となっている。

④『東行漫筆』は、1809年(文化6年)の見聞である。このなかに「ムカワ水源三日路程あり、此川に魚無し。依て無川と云よし。」という一項がある。

⑤1824年(文政7年)の上原熊次郎『蝦夷地名考并里程記』には、以下のように書いてある。

ムカワ：休所。川舟渡。モンベツ江四里程。夷語ムカなり。則水の涌くといふ「事」。此水上平原にして所々に水の涌き出て、源水となる故、地名になすといふ。

⑥『天保郷帳』として知られる『松前嶋郷帳』(1834年、天保5年)には「ムカワ」とある。

⑦『東蝦夷日誌』は、松浦武四郎の1858年(安政5年)の見聞録である。これのユウブツ領の項、6月29日の部分には地名の「義」について記してあるが、武四郎の本文説明にもあるように、ここの地名については『武加和誌』が詳しい。少し長くなるがムカワ、イモッペの「義」を述べた部分を引用する(『戊午武加和日誌』秋葉実解説1985年『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』)。なお、ここの地名には「イモクナイ」「イモクベ」も使われている。

原名ムカと云しが、今延てムカワと云へり。是全く和人が延せし也。夷人未だムカと詰て通称するなり。其和人が延せしと云は、此川によって(をさして)武河等と字を当、また東部のウラカをして浦河の字を当て、原称の意をば失廃し、却て土人にも其訳を大概は解すものなし。ムカ、訳して山中処々より水涌出る事による也。此水源ユウハリの南の麓なる平地にして其処諸々より水涌出り。其水一川に帰して此大河に成り来るなり。故に此名あるなり。ムカ、水涌出ると云儀のよし也。

イモツ(ク)ベ村

同じく東岸小川の上に有也。此辺川の西岸には谷地有て、茅蘆原也。少し洪水の時は沼の如く成るよし。其名義は此沢にはヲタタイキと云て、飛刳て歩行る虫有。是を夷言イムクと云よしなるが、其が居りしによつて号しとかや。本名はイムクベツのよし也。其ヲタタイキとは砂蚤と云事也。是浜の砂原ならで不居虫也。

⑧1874年(明治7年)に北海道開拓使が取りまとめた『北海道地誌提要』には、井目戸(イモクヘ)村の表記になっている。

⑨『開拓使事業報告』第巻編、地理の部、1882年(明治15年)2月の胆振国勇払郡の村として「井目戸」村がありこれには「キメド」のふりがながある。

⑩永田方正の『北海道蝦夷語地名解』(初版1891年：明治24年)の復刻版(1984年)は、以下のように書いてある。胆振国勇払郡の項である。

Mukap, =muk-ap：ムカプ：羊乳草(ツルニンジン)アル処。土人此根ヲ食料トス。

○鵠川(ムカハ)〔村〕ト称ス。

○松浦氏日誌ニ本名「ムカ」ナリ延(ノビ)タル義トアリ。「ムカ」トアルハ是ナリ延タルトハ非ナリ。

さらにムカブ川筋の項に

Imokpe：イモクペ：陥(ヲトシ)ノ餌(エバ)ヲ置ク處。井目戸(井モクベ)村

以上の古文書でのイモッペの表記は、「イモクペ」「イモクベ」「井目戸」「イムクベツ」「キメド」などがあり、初出は①『元禄郷帳』(1700年)をもとに書いたという『東夷竊々夜話』(1805年)である。現在広く流布している「みみず」に関連する元といえる⑨永田方正の『北海道蝦夷語地名解』が述べられたのは1891年のことであった。松浦武四郎の『武加和誌』にある「ヲタタイキ」「イモクベ」「イモクナイ」については、後に検討する。『開拓使事業報告』にみえる「キメド」は漢字の読みそのままではないので、アイヌ語地名の検討からは除外できる。

f 20世紀にあらわれた説

① J. バチュラーの『アイヌ地名考』は1925年の著述である。中川裕の訳は以下のようなものである。

MUKAWA(鵠川)：Muka-pet：「せき止められた川」または「しみ出している川」。こう呼ばれるのは、満ち潮のたびにその河口に大量の砂が集まり、川がそこを流れ出ることが難しくなるからである。②1954年(昭和29年)の『北海道駅名の起源』の著者は、高倉新一郎、知里真志保、更科源蔵、河野広道である。鵠川駅(むかわ)については、「アイヌ語ムッカ・ペツ(塞がる川)から出たもので、鵠川が上げ潮のため砂で川口が塞がれるからである」と説明している。

この本には「アイヌ語地名単語集」というのが、知里真志保の執筆で付け加えてある。

これには「ムク(muk)ふさがる。ムッカ(muk-ka)ふさがらす。」とある。

③1968年(昭和43年)に刊行された『鵠川町史』の「地名解」を担当した更科源蔵は、以下のように説明している。

鵠川(むかわ)：疑問の地名であったために、色々伝説があった。昔この川はムカワといわずモシリカベツといったが、ある時この付近一帯が凶漁に見舞われたとき、人びとはこの川筋に多いムック(ばあそぶ)の根を掘って食べたため助かったのだ、それからムックアツというようになり、それがなまってムカワとなったと土地の古老たちは伝えている。しかし本当はムッカ・ペツというので、入鹿別と同じように海の潮のために砂で河口がふさがる川なので、ふさがる川(ムッカ・ペツ)と名付けられたものである。現在も時々川口がふさがってかわることがある。

井目戸(いもっぺ)：鵠川町宮戸の古名。イモッペとは魚を釣る餌などのことで、この辺で昔よくみみずを掘ったといわれている。

④1972年(昭和47年)山田秀三は『北海道の川』のなかで、鵠川について次のように注記した。

勇払郡の大川であるが、この川名の意味も、ほかの大川と同じように、はっきりと残っていない。

(中略)[鵒川のアイヌ系古老から聞いた話]並んで流れている沙流川は男で、鵒川は女であった。沙流川の古名がシシリ・ムカなのに対し、鵒川は女なのでモ・ムカ(小さい・ムカ)と呼ばれ、それから鵒川の音が生れた。《註 この二つ並んだ有名な川が、共に muka の音を持っていた。そこにこれら川名の謎がありそうである》

さらに山田秀三は1984年(昭和59年)『北海道の地名』のなかで鵒川(むかわ)とイモクペについて記述している。鵒川(むかわ)については、上原熊次郎、松浦武四郎、永田方正、バチラー、『北海道駅名の起源』などの諸説の紹介であり1972年段階での説明を出るものではない。イモクペについては、永田方正の説のみを紹介し、「イモクペ(imokpe)は、餌、みみずの意」と書いた。

永田方正の「陥(ヲトシ)ノ餌(エバ)ヲ置ク處。」をもとに更科源蔵の「みみず」説があらわれる。

g 松浦武四郎の『武加和誌』

さきにe⑦で引用、紹介した松浦武四郎の1858年の見聞である『武加和誌』のイモッペ部分を現代文(意訳)に直すと、以下のようになる(部分)。

イモクペ村は(ライバチンやチン)と同じように、(川ムカワ)の東岸の小川に接してある。この川の西岸は谷地なので、茅芦などの原っぱになっている。ちょっとした洪水のときでも、沼のようになってしまうとの事である。ここの名前の元はと聞いてみたら、この沢(川筋)には「ヲタイキ」という飛び跳ねる虫がたくさんおり、この虫をアイヌ語では「イムク」と呼ぶので、このような地名になったというのです。ですからきちんと言うときは「イムクベツ」とのことです。その「ヲタイキ」とは和語では砂蚤になります。つまり海浜の砂地でないと見られない虫の事なのです。

さらに『東蝦夷日誌』の該当部分をみると「イモッペ(東岸小川、人家六軒)、此上にヲタイキと云砂地を飛虫多きより号(なづく)る地有」と記してある。これは「川の上流部に虫の多いところがあるので、この虫の名前をもとにして地名にした」というのである。

h アイヌ語

上に見てきた『武加和誌』ではアイヌ語「ヲタイキ」「イモクペ」「イモクベツ」が地名イモッペについて関係する語句だと述べてある。それではこれらの言葉はどのようなものなのか。

武四郎は「ヲタイキ」を砂蚤と記している。これはヲタ(ota:砂、砂浜)、タイキ(tayki:のみ、蚤)で、まことにわかりやすいものである。タイキ(蚤)は、以下に引用する①から⑦まですべての辞書等で見ても北海道全体に通じる言葉である。

更科源蔵の『コタン生物記、Ⅲ野鳥・水鳥・昆虫篇』(1977年)にはノミの項で、名寄付近のタイキオナイ(ノミの多い川)という小川について「ノミは川砂からわくものだ、だから山に行くと米粒ほどのノミがいるものだ」という古老の話が紹介してある。

「イモクペ」と「イモクベツ」とは略称と正式名称の関係であり、「イモクベツ」はイモクにベツ(pet:川)が加わった「イモクの川」である。地図に使われていた「イモクナイ」は武四郎の知識の中では同じ「イモクの川」であった。それでは「イモク」はどのようなものなのか。

①萱野茂『萱野茂のアイヌ語辞典』(1996年)には「イモク(imok)餌」となっている。

②田村すず子『アイヌ語沙流方言辞典』(1996年)には「imok(イモク)【名詞】餌(飼うためではなく魚やネズミなどを取るのに使う餌)」とある。

③久保寺逸彦編『アイヌ語・日本語辞典稿』(1992年)には「imok:餌」とある。

④中川裕の『アイヌ語千歳方言辞典』(1995年)には「イモク:imok:(名詞)(魚などを捕らえるためのえさ。)」とある。

⑤更科源蔵の『コタン生物記、Ⅲ野鳥・水鳥・昆虫篇』(1977年)には釣餌虫の項目があり、「魚を釣る餌のことをイモクという」文章の後にミミズ、コガネムシ類、クワガタムシ、カミキリムシ類などについてそれぞれの説明がなされている。

⑥服部四郎の『アイヌ語方言辞典』(1964年)には「イモク(imok)」に関して二つの説明がある。ひとつは「えさ(餌)」であり、胆振幌別、沙流でのものとする。沙流では「魚やネズミを取るための」とつけ加えてある。もうひとつは、「みみず」であり、帯広、旭川でのものとする。胆振幌別、沙流でのみみずは「ツニン(tunin)」となっている。

⑦知里真志保の『分類アイヌ語辞典、第二巻、動物篇』(1962年)をみると、ミミズを imok とするのは旭川であり、胆振幌別、静内、様似では tonin、鵒川では kenas-tunin となっている。

⑧文化元年(1804年)の序で知られる上原熊次郎の『蝦夷方言藻汐草』には「蚤：タイケ」「ミミズ：トニン」とある。

以上見てきたようにイモクは餌なのであり、すぐにミミズにつながる事はない。⑥⑦でみてもムカワ地域でイモクとミミズが結びつく事は適切な説明ではない。ミミズについては「トニン、ツニン、トウニン」「tunin」などとなっているのだから。

i 地理的、景観的な妥当性

さきに5万分の1地形図で検討したが、イモッペのコタンの上流域は沼沢地なのでイモッペ川をさかのぼる事は、氷結期間以外は容易なことではない。それでは砂蚤が多く見られる頃、つまり沼沢地がぬかるむ季節に人々は、「イモクの川」の上流の様子をどのようにして認識したのであろうか。

同じ地形図の読み取りにおいて「イモッペ沢」を横切る「小路」があることを述べた。この小道は、ムカワの河口部と内陸部とを結ぶ道であり、イモッペ、チン、ライパチンなどの諸コタンにとって、欠くことのできぬものであった。したがって、この小道付近の風物こそが「イモク」であり、その川の名称とするほどの特色を持っていたと考えられる。

イモッペの流域は17世紀中葉には降下火山灰(1663年の有珠山と1667年の樽前山)に覆われてしまう。これは平坦部で厚さ60cmにも及ぶものであり、植生、景観に大きく影響したであろう。おそらく地表部分は白色砂で覆い尽くされ、柏林に代表される樹林の復活は緩やかにしかすすまない。

j おわりに

宮戸4遺跡の調査に従事し、ひと夏周辺の地形を観察する機会に恵まれた私の見るところ、松浦武四郎の地名起源説は十分に成り立つと考えられる。

アイヌ文化期において、宮戸4遺跡の周囲は丘陵地帯ではあるが川に沿う沢部分には砂地が広がり、そこに砂の蚤「ヲタタイキ：イモク」が目につく場所であった。それ故に、「イモク」を特色ある川の名前に使った。「イモッペ沢」に砂浜と類似した景観が広がっていたのは、考古学的な時間尺度で見ると、限定された時期の局地的な事象だったと理解できる。これには踏み分け道が横切って往来が確保されていた事も、地域社会における「イモク」の共通認識成立に影響したと見てよい。

松浦武四郎が「是(：ヲタタイキ)浜の砂原ならで不居虫也」と書いたのは、地名にまつわる特色ある事柄、場所を確かめられなかったこととともに、いくらかの不思議を込めたものである。さらに、武四郎の「イモク」に基づくと、ムカワのあたりには、砂蚤を餌とする地域社会があったことが推定できる。したがって、これの具体的な事柄については、別途説明が必要とされよう。(西田)